

クィア神学の挑戦

評・森本 あんり (神学者
国際基督教大学教授)

多くのレットテル貼りがあるように、はじめ性的少数者への蔑称だった「クィア」(奇妙な)は、やがて差別への抵抗として使われる有意義な自称語と

非規範的神学 3人に焦点

三位一体論やイエスの身体性にこそ、近代の性的アイデンティティを脱構築する視座があるという。キリスト教の洗礼は、ジェンダーなどの社会的なカテゴリーを「パロディ」化して非究極化する手段となる。

とはいえ、それで現実世界に存在する権力構造や差別の苦悩がなくなるわけではない。マルセラ・アルトハウス・リードは、祖国アルゼンチンの上品な秩序に挑む「下品な神学」を目指す。それは、性的にあからさまな表現で読者にショックを与える。本紙面上で許されるぎりぎりの範囲で引用すると、神学とは「あなたの手を神のスカートに入れる」ことであり、「長血を患う女」を癒やしたイエスは、生理を不浄視する宗教規範そのものを解体すべきだった、と批判される。

クィア研究は、しばしばもっとも近い理解者にも批判の刃を向ける。その刃に身を切られる痛みを知る著者は、現代神学の立ち位置を示す優れた指標である。

◇くどう・まりえ 明治学院大キリスト教研究所客員研究員。月刊誌『福音と世界』の編集にも携わった。



新教出版社
4730円

なった。七〇年代に同性愛とフェミニズムをめぐって始められた神学論争は、ゲイとレズビアン、白人と非白人などのギャップの認識からクィア(非規範性)へと多元化して拡大してゆき、多くの研究と活動実践を生み出してきた。

非当事者の立場で書かれた本書は、これまでの研究史を簡潔に整理した上で、三人の現代神学者に焦点を当てて評価と批判を加えており、なぜクィア研究が神学と結びつくのか、という一般読者の問いにも十分答える好著となっている。

カーター・ヘイワードは、キリスト教が作り上げてきた反セクシュアリティと女性嫌悪の性規範を批判し、「エロティ